

# 異学年の関わりを生かした生活科の学習

複式低学年単元「こんにちはたいしゃく小学校のみなさん」の実践をもとにして

吉 浦 公 子

## 1 研究課題

広島県比婆郡東城町立帝積小学校は、広島県の北部、岡山県境に近い国定公園帝積峡内に位置している。昭和47年に広島大学代用附属学校となり、平成6年度からは、本校複式学級との交流学习を本格的に開始した。これまでの2年間では、それぞれの学校において宿泊を伴った授業交流や、地域体験を行っている。この交流学习によって、複式学級の特性である異学年集団、少人数学級をよさとして生かしながら、子ども達の異なる環境への気づきやそこに住む人々と関わりが深められている。

現在、複式少人数学級における生活科では、同単元同内容の活動が多く行われている。この方法では、常に下学年に学習内容が受け継がれて続いていくという、複式学級の特性を生かすことが可能である。ここでは、同程度の規模をもつ2つの学校の継続した交流を通して、1・2年生合同の生活科授業づくりを考えた。

本稿では、単元「たいしゃく小学校のみなさん、こんにちは」を通して、「異学年の関わりを生かした生活科の支援」のあり方について考察していきたい。

## 2 単元の概要と研究の視点

### (1) 単元の概要

#### ①学習のねらい

ア 他の地域での体験や友だちとの交流について自分なりに工夫して表現したり、楽しく受けとめることができる。(1・2年生)

イ これまで体験した他の地域の友だちとの関わりをより深めるための方法を考えることができる。(2年生)

ウ 他の地域の人々と進んで友だちになろうという意欲をもつ。(1年生)

#### ②学習の展開

第一次 (2年生) 帝積小学校のことを1年生に伝えよう 2時間(本時 第2時)

(1年生) 帝積小学校のことを教えてもらおう 1時間(本時 第1時)

第二次 (2年生) 帝積小学校のみんなにわたしのことをつたえよう

(1年生) 帝積小学校の友だちに近頃の自分たちのことをつたえよう 2時間

#### ③本単元に関わる児童の実態

本実践は、1・2学年複式学級で実施した。学級の児童は、次のように構成されている。

第1学年児童8名(男子4名・女子4名)、第2学年児童8名(男子4名、女子4名)

本学級の2年生は、2回の両校における地域体験や交流学习を通して、帝積小学校の子どもたちとの関わりを深め、その後も手紙等を通じて交流を続けている。また、平素から本学級の1年生の児童に学校生活について伝えようという意欲もち、帝積小学校との交流についても、時折断片的ではあるが、語っている姿が見られる。1年生は、本学級の2年生の児童に対して親しみをもち、様々なことを質問したり、相談できるようになってきた。帰宅後、自分の住む地域の他校の児童とは遊ぶことが少なく、遊ぶ相手は主に兄弟や本校の児童であることが多い。

## (2) 研究の視点

### ①人との関わりを2年間を通して計画する。

単式学級における生活科の授業において、栽培を中心とした単元や季節の変化に関わる単元は年間を通して計画される場合が多い。また、特定の人々との関わりを2年間通して位置づけて行くことも考えられる。他校の同学年の児童との交流を2年間継続すると、自分の成長を相手に伝えたり、気付いてもらう活動も可能である。

このような2年間の継続した単元を複式学級の特性を生かして計画するとさらに豊かな活動が期待できる。例えば、他校の同学年の児童との交流の場合、新年度になると、2年生は新入生を相手校の友だちに紹介する。また、自分の学級の1年生にこれまでの相手校との関わりを伝えるなど活動の広がりが見込まれる。さらに、交流する学校が距離的に離れている場合は、対象となる人に自分の思いを伝える手段や、会いに行くための方法を考えるなど、自分のめあてを大切にしながら問題解決的な活動への高まりも考えられる。

### ②活動の小さな伝統を作っていく。

A・B年度方式の学習では、年間計画上では、2年間を1サイクルとして学習が完結する。しかし、実際には、いくつかの活動は学級の歴史となって構成児童は変化しても受け継がれて行く場合が見られる。これは、前年度の1年生の児童が、体験の記憶をもった2年生として学級に残り、次に伝えていく複式学級ならではのよさである。複式学級（単式少人数学級の場合は2学年のまとまりとして）との交流はそれを両校とも生かすことができると考える。この学級の「小さな伝統」のよさに着目して、次の1年生・2年生に受け継がれて行くような活動も考えてみる。

## 授業仮説

仮 説	1年生に伝えるという具体的なめあてを設定するならば、他校での自分の体験や友だちとの関わりを自分なりに工夫して表現するであろう。(2年生) 劇的表現活動を取り入れて2年生の発表に参加するならば、知らない地域や人々についての紹介を主体的に受けとめるであろう。(1年生)
--------	---

## 3 単元「こんにちは、たいしゃく小学校のみなさん」における学習の実際

### (1) 本時の意図

本時は、帝積での地域体験や帝積小学校の友だちについて2年生が紹介する活動である。2年生は「帝積小学校のことを1年生に伝えよう」、1年生は「帝積小学校のことを教えてもらおう（いってみよう）」というめあてをもっている。自分の調べたことを伝えたり、体験する中で、1年生は未知の地域や人々と関わっていくことに興味をもち、2年生は、他の地域の友だちとの交流を積極的に深めていこうという意欲を高めることねらっている。

発表の際、発表する側と見る（聞く）側に分けず、劇的表現活動を取り入れることによって、1年生も楽しく参加しながら、2年生の表現を主体的に受けとめることができるようにしたいと考えている。また、複式学級の特性の一つである異学年との関わりを大切にする。1年生は、2年生が知らないことを教えてくれた喜びや楽しさを味わい、2年生は自分が工夫して表現したことを1年生が楽しく興味をもったという、自信をもつことができるようにしていきたい。

### (2) 本時のねらいと評価の観点

#### ①本時のねらい

- 1年生 帝積小学校の子どもたちと進んで関わろうとする意欲をもつことができる。
- 2年生 帝積小学校の友だちやまわりの様子を工夫しながら表現することができる。

関心・意欲・態度	自分の体験した他の学校の友だちとの交流をどのように深めていこうとしているか。(2年生) 自分たちの学校とは異なる地域の子どもたちに対して、どのような関心をもったか。(1年生)
思考・表現	他の地域での体験や他校の友だちの様子についてどのような方法で伝えようとしているか。(2年生) 自分の知らない地域や人々についての表現をどのように受けとめているか。(1年生)
環境や自分への気付き	自分や友だちの表現のよさについて、どのように気付いているか。 (1・2年生)

### (3) 学習の流れ

学習活動	みとりの視点	指導・支援活動
1 帝積小学校の友だちについて1年生に伝える準備をする。 (2年生) ・伝えたいこと ・伝える方法	○表現に必要なものや道具をどのように準備しようとしているか。 (2年生)	1 帝積小学校の友だちや、学校のようすについて、1年生に伝えることができるように準備の時間をとる。 ◎表現の準備は、子どもたちが行うが、その際、一人一人の表現が生きるよう支援する。
(本時の活動) 2 帝積小学校の友だちのことを1年生に伝える。(2年生) 帝積小学校の人やまわりの様子についての2年生の表現を楽しむ。(1年生)	○これまでの活動をどのように表現しようとしているか (2年生) ○2年生の活動や表現について、どのような関心をもったか。 (1年生)	2 ◎帝積小学校に全員で出かけるという設定の劇的表現活動を取り入れ、イメージを描きやすいように支援する。 ◎2年生の表現を1年生の児童が主体的に受けとめることができるように、直接体験する場も設定していく。
3 2年生の表現について楽しかったこと考えたことを発表する。 (1年生) 1年生に伝えるための自分たちの表現について振り返る。 (2年生)	○2年生の表現や自分たちの活動についてどのような振り返りを行っているか。 (1年生) ○自分の表現や活動についてどのような振り返りを行っているか。 (2年生)	3 ◎友だちや自分が表現したよさや表現の楽しさに気付かせるために振り返る場を設定する。 その際、できるだけ2の活動の雰囲気を保ちながらすすめる、自然な形で4の活動に入れるように留意する。
4 帝積小学校の友だちとの交流を深める計画を立てる。 (2年生)	○新しい友だちに対してどのように関わろうとしているか。 (1年生)	4 帝積小学校の友だちの最近の様子に目を向けることができるように、帝積小学校の先生の話の話を聞いたり、質問したりする場を設定する。

帝積小学校の人々と仲良くなる方法を考える。(1年生)	○友だちの成長や、生活の変化に対してどのような関心をもったか。(2年生) ○他校の友だちとの交流をどのように深めようとしているか。(2年生)	◎交流を深める方法については様々な考えが出ると予想されるその際、いくつかはまとめず、可能な限り一人一人の思いが生きるように言葉かけをする。
(授業後の活動) 自分たちで考えた交流を深めるための方法を実際にやり始める。	○自分で考えたことを具体的にどのように実現しようとしているか。 (1・2年生)	具体的な支援は、次時からおこない、ここでは一人一人の思いを見とることに重点をおく。

#### (4) 主な学習活動と支援活動

次に示すのは、上記の学習の流れの中の〔2〕(2年生：帝積小学校の友だちのことを1年生に伝える。1年生：帝積小学校の人やまわりのようすについての2年生の表現を楽しむ。)の活動と抽出児の反応である。

児童①～④(1年生男子)、⑤～⑧(1年生女子)、⑨～⑫(2年生男子)、⑬～⑯(2年生女子)

児童のめあて 2年生児童の表現方法	抽出児の反応		
	児童⑭(2年女)	児童①(1年男)	児童⑤(1年女)
ア) 帝積小学校はどこにあるか ・バスごっこをする。 1年生①～⑧乗客 2年生⑩運転手、⑭バスガイド ⑨⑩⑫⑬⑮⑯車窓からの景色 ・国道2号…渋滞する車を表現 ・高速道路…速度の速い車を表現 ・帝積小学校付近…田畑、木 交通量の少ない様子を表現	「ただいまから皆様を帝積小学校にお連れします」 「左に見えますのは私たちの近くの国道2号線です。車が渋滞していますね。」 「これから高速道路に入ります。」 「出発してから3時間たちました。田んぼが見えます木もたくさんありますね。帝積小学校がみえてまいりました。」	ナップサック、制帽で席にすわる。  「市役所はどこ」  「100キロだ」	ナップサック制帽で席にすわる。  「今朝ここ通ってきた」  「えっ、3時間もたったの」
イ) 帝積小学校の友だちを紹介する。 ・昨年自分のパートナーになった2年生の似顔絵を見せて、簡単な劇をする。	「東雲小学校の皆さんこんにちは。私は帝積小学校の橋根です」	「こんにちは。よろしくお願ひします」	「みんな2年生? 1年生もいるの」 ・1年生がいるかどうか心配な様子

ウ) 梅の実とりと梅ジュースを紹介する。

- 昨年持ち帰った梅ジュースの瓶を1年生に見せて何であるか当ててもらう。
- 梅ジュースを1年生に飲んでもらう。

「この瓶に入っているのは何でしょう」

「一口飲んで当てて下さい」

「答えは梅ジュースです。帝積小学校には梅の木がたくさんあって梅のみをとって、梅ジュースにします」

「干しぶどう？」

「りんごジュースですか」

• 首をかしげる

「酸っぱいけどおいしいよ」

エ) 帝積小学校近くの自然のようすを紹介する。

- おたまじゃくし、蛇の様子を身体表現する
- 帝積の川の冷たさを氷水で再現する



「おたまじゃくしだ」

「わぁ、この水冷たい」

オ) 夜の帝積の自然を紹介する。

- 黒板にチョークで星をたくさん描き、見える星の多さを表現する。
- 夜の蛙（かじか）の声を模倣して再現する



• 黒板に星をたくさん描く

「星がいっぱい」

「落書きみたい。星かな。」

「鳥の鳴き声ですか」

「聞いたことないよ。そんな声」

カ) 帝積小学校で作った笹餅を紹介する

- 笹餅を見せて、1年生に試食してもらう。
- 1年生に作り方を教える。


• 児童⑬の説明に合わせて、実際に作り方を1年生に教える

「食べてもいいですか」

「やってみよう」



• 児童⑬のやり方を見ながら、餅を笹で包んでみる。

<p>キ) 一年生から質問を受けて、答える</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 児童⑤の質問に対して、他の2年生と相談する「今年1年生も入学したとは思うんだけどわかりません」</li> <li>• 児童②(かじかの鳴き声を表現した児童)に対して「夜だから姿を見ていませんといたら」と小声で助言する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 指名されるまで何度も手を挙げる</li> </ul> 	<p>「帝積小学校には1年生の人もいますか」</p> <p>「『かじか』はどんな色ですか」</p> <p>「『かじか』って蛙だったけ」とどなりの児童⑥に尋ねる。</p> <p>• 児童②「見ていません」の答えに「ざんねん。見てみたいな」という</p>
---------------------------	---	--	---

上記の活動における教師の支援としては主に次の点を中心とした。

○主体的な表現と受けとめのできる場の設定(劇的表現活動)

2年生が伝えたいことを、より豊かに表現でき、その表現を1年生が十分受けとめることができるように、発表の際、発表する側と見る(聞く)側に分けず、劇的表現活動を取り入れた。

次に示すのは、劇的表現活動を取り入れた例である。

上記の表現ア) 児童用の椅子をバスのように並べ、1年生が乗客になる。

2年生が、運転手・ガイド・車窓から見える景色を表現する。

表現エ) 2年生全員で、河原の生き物を表現する。川の水(氷の入った冷たい水)を持ち込んで1年生が冷たさを感じながら水遊びができるようにする。

表現オ) 黒板に2年生が星を描き、児童⑩⑪が蛙の鳴き声を再現する。

○異学年の関わりを大切にされた言葉かけ

複式学級の特徴の一つである異学年との関わりを大切にされた言葉かけによる支援をおこなった。1年生は、2年生が知らないことを教えてくれた喜びや楽しさを味わい、2年生は自分が工夫して表現したことを1年生が楽しく興味をもったという、自信をもつことができるように、教師は場によって1年生・2年生の立場で活動に参加した。

次に示すのは、表現キ)の一部である。

T : 1年生のみんなは、今日帝積小学校に行って、何が楽しかったですか。

児④: 梅ジュースがおいしかったから、また飲みたいです。

T : 1年生のみんな、ジュース気に入った? (「おいしかった」「また飲みたい」) 酸っぱいかなって2年生は心配してたね。気に入ったようですね。

児⑨: 気に入ってくれてよかったです。今度帝積小学校に行ったら、頼んであげるね。

児⑧: バスの窓から見た国道のマグドナルドのお店がよかったです。アンコール。

T : お店はあっという間に通り過ぎたけど、1年生の人たちは気付いたんだね。2号線の町の様子をみんなでなんども相談したのがよかったね。

児⑩: もう一回やります。マグドナルド(両手で「M」の形を頭の上につくる)

○次への活動のきっかけとなる場づくり

ここでは、表現キ)の後で、授業者(T①)と帝積小学校の低学年担任の教諭(T②)とが連携をとって、チームティーチングとした。

T①：それではそろそろ東雲小学校に帰りましょう。来るときは3時間かかったけれど、今度はワープして帰りますよ。

(児童「ウルトラ・100倍・ワープ…等と乗り物の名前を自由に言い合う」)

2年生も椅子に座って…。みんな目をつぶってしっかりつかまって1・2・3!

(児童が下を向いている間に、後ろの椅子に帝積小学校の教諭が座る)

T①：さあ、みんな、東雲小学校に着きましたよ。

児①：もう着いたの。

児⑨：(後ろに気付いて) あっ。

児⑬⑭：先生だ。いつの間に。(他の児童も振り返る)

T②：東雲小学校の皆さん、こんにちは。先生はウルトラ100倍ワープ…で、帝積小学校から、みんなについてきてしまいました。2年生のみんなは大きくなったね。1年生の皆さん初めまして、私は帝積小学校のT先生といます。

T①：みんなから先生におたずねしたいことがありますか。

児⑭：帝積小学校の2年生のみんなは、元気ですか。

T②：みんな元気ですよ。そうだ。先生のパワーで、この組のテレビに、今の2年生の様子をうつしてみようかな。では1・2・3…。

(T①：予め準備しておいた帝積小学校の2年生8名のメッセージと給食時間の様子のビデオを再生する。)

(2年生児童：口々に、自分のパートナーが映る度に、感想を言い合う)

(1年生児童：黙ってじっと見ている)

児①：帝積小学校には1年生もいますか。

T②：今年は4人の1年生が入学してきました。1年生の友だちもいるから安心してね。

(1年生4名が写った写真を見せる)〈以下略〉

#### 4 考察

本実践を授業仮説に照らして考察する。

2年生の「他校での自分の体験や友だちとの関わりを自分なりに工夫して表現するであろう」についての児童の活動と反応は次のように考えられる。

工夫した表現については、2年生の児童8名は、事前の調査ではそれぞれの興味の方向は異なっていたが、実際の表現ア～カ)では、明確な分担をせずに協力して表現をしている。

表現ア) 帝積小学校はどこにあるか

2年生児①運転手、児⑭バスガイド、

児⑨⑩⑫⑬⑮⑯国道・高速道路・帝積小学校付近の車・店・田・樹木等

表現オ) 夜の帝積の自然を紹介する

2年生児⑩⑪蛙の鳴き声を模倣、児⑨⑫⑬⑭⑮⑯星を表現(黒板に描く)、川の水の音の模倣

1年生の「知らない地域や人々についての紹介を主体的に受けとめるであろう」について授業後の抽出児の新たな問題及び活動の様子から見ていく。

	児童①	児童⑤
◎授業終了後の感想 (聞き取りによる)	<ul style="list-style-type: none"> <li>• かじか(蛙)を見に行きたい。</li> <li>• 梅の木に登って、梅のみをとってみたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 帝積小学校に1年生がいてよかった。</li> <li>• 本当の川の水をさわってみたい</li> </ul>
◎本単元に関わる その後の活動内容	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 帝積小学校の子ども達の来校前に、学校の周りの面白いところを地図に描いて準備する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 帝積小学校の1年生に宛てて、自己紹介カードを書く</li> </ul>

児童⑤は、帝積小学校に同学年の児童がいるかどうかに興味をもった。単元終了後、帝積小学校の1年生宛の自己紹介カードを作成した。

このことがきっかけとなり、本年度は、学級全員でビデオと手紙という方法によって帝積小学校の1年生には、自己紹介を、2年生には1年間の成長の様子を伝えることにした。

児童①は、蛙の鳴き声の表現に興味をもった。色について質問したが、2年生が声のみで姿を知らなかったために、自分の目で確かめたいという意識が高まったようである。

なお、その後、来校する帝積小学校の児童との交流を中心に次の単元を実施した。

単元 「わたしの町(東雲小学校のまわり)をしょうかいしよう」(10～11月)

第一次 自分の町を紹介するコースや交通手段等を調べて計画を立てる。(2年生のみ)

第二次 2年生と一緒に乗り物に乗って町を探検する。(1・2年生)

第三次 相手の学校の友だちに自分の町を紹介する(1・2年生)

児童①は第一次の活動の期間(この小単元は2年生のみ。1年生は別の単元)に、自分だけで来校する帝積小学校の友だちに町を紹介する計画を立てたり、第二次でコースが決定すると、乗り物の切符の買い方や買い物の仕方をを事前に練習して、第三次の活動の準備をしていた。

両校児童の交流は3年目となる。実際に会うのは、年に1回であり、合同の生活科の活動は、半日程度である。しかし、年間を通して、相手校を意識した活動をそれぞれの学校で計画する中で、両校の子ども達は精神的な関わりを深めている。この交流をさらに継続しながら、異学年の関わりによさを生かした生活科の学習における支援のあり方を実践研究していきたい。